

---

# 神の崇りに抱擁を

ナギシュウタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神の崇りに抱擁を

### 【Nコード】

N6724R

### 【作者名】

ナギシュウタ

### 【あらすじ】

大人のいない村。深い森と荒々しい山に囲まれ、外の世界と隔絶された場所。

その中で明るく日々を過ごしていた子供だけの村には、こんな言い伝えがあった。

聖なる森に流れる川には決して近づいてはいけない。邪悪な蛇が、人間を地獄の渦へ突き落とそうと蠢いている

それは悪魔の手先。

それは神の祟り。

それは伝説。

それは真実。

それは、全てを越えて届く、絆の物語。

忘れられない、忘れたくない物語。

ナギシユウタと申します。このたび小説を書かせていただきます。若干緊張。凍結させてしまって迷惑をかけないよう、頑張りますので、どうかよろしくお願いします。

《注意》

この小説にはたまにグロイ表現や過激な表現が含まれますので、念のため【R15】。ご注意ください！

若干シリアス調です。ラノベのつもりなのに、ライトどころかダークだよこれ！)

こんな野郎ではありませんが、意見感想等ありましたらご気軽に！

## エピローグ

深い森を一人で歩いてきた。薄暗い森だった。道しるべも何もなく、似たような景色が延々と続いている。

・・・どこに、いますか？

あの日以来、こうやって時々この森に来ている。地面は湿り、虫達が王国を造り、野生の息吹が聞こえてくる。

あの出来事が、遙か遠い昔の出来事に思える。懐かしさすらない。ただあるのは、寂しさ。

歩を止めた。

昼間にもかかわらず暗がりしかないこの空間。にぶい緑色ばかり目に付く地面。その中に一輪、ぽつんと花が咲いていた。

澄んだ青の光を放っていた。

駆け、その花の元へ行つた。ひんやりと涼しい、そしてほのかに甘い香りがした。

視線を上げると、ぽつんともう一輪、青い花が咲いていた。その先にも、ぽつん。その奥にも、ぽつん。何かに導かれるかの如く、その花に沿って歩いていく。

ふと、目の前に何か、動くものが横切った。すぐに草むらの中に消えていったが、そのなめらかな尻尾が一瞬、見えた。

一匹の蛇。

忘れる事ができない。

一生、忘れてはいけなのだろう。いや、きっと、忘れる事はできない。

だって、忘れたくないから。

## “ 聖なる森 ”

少年は深い森の中を一人で歩いていった。

何百年もの間成長してきたであろう巨大な木々が鬱蒼と生い茂る。それらは空を覆い隠して、少年と地面とに暗い影を落とす。日光が当たらず、常に湿り気を帯びている地面にはみずみずしい草が生え、小さな昆虫が慌ただしく動いていた。

少年の体には麻で作られたシャツと短いズボン、そして裸足。背中には、酷なほど大きな丸太が何本も縄でくくりつけられている。しかし少年のその足取りは軽く、涼しい顔をしている。火をくべる為の薪を集めるのはいつもの仕事、村の誰もがやっている仕事である。

しかし、ここまで森の深い所に入っていく者はその少年以外いなかった。なぜなら、そこは村の大人達が恐れていた、“ 聖なる森 ” と言われる領域だったからであった。

もつとも、村の大人達は既に全員死んでしまっているのだが。

数年前、森の向こう側から現れた隣村との争いによって、男はおろか、女性まで、大人は全員殺されてしまったのであった。そのまま、子供も皆殺されてしまはずだったが、なぜか隣村の人々は逃げ去っていったのだった。

少年は、もういない大人達の言い伝えなんかには縛られなくなかった。そんな反抗心が、少年の足を森の奥へ進めていた。

それに、父親の影響もあった。

少年の父親は、少年がまだ幼い頃に行方不明になり、それきりだった。少年の父親は“ 聖なる森 ” の存在を信じず、森の外の世界をみてみたいと話していたと、少年は後から知った。

そしてその父親が行方不明になった場所がこの“聖なる森”であった。

少年はどんどん森の奥へ足を進めていった。“聖なる森”とは言っても、普通の森と違う所は特になかった。あえて言うなら、薄暗さが少し増した程度か。

なんだ、やつぱり何もいないじゃないか……。澄みきった草の香りが胸一杯に広がる。目を閉じて耳を澄ますと、小鳥のさえずり、命の声が聞こえる。心地よい。

なんて素敵な場所なんだ。なんで大人達はこの場所を恐れていたんだろう？ ただの迷信じゃないか。自然はこんなにもきれいなのに……。少年が思った時、  
ぴちゃっ

と、足元で音がした。見ると、地面が水を滲ませていた。白い素足に冷たい水が混じり込んで気持ちいい。水は薄く流れを作っており、その流れを目で追うと、その先には大きな一本の川があった。

少年には、見た事のない長さだった。曲がりくねる事もなく、まっすぐに、そしてどこまでも続いていた。

川のそばに大きな丸太が横たわっていた。少年はその丸太を拾おうと、その川に近づいた。

少年はふと、幼い頃に聞かされていた伝説を思い出した。

聖なる森に流れる川には決して近づいてはいけけない。邪悪な蛇が、人間を地獄の渦へ突き落とそうと蠢いている

少年は頭を振り、この言葉を頭から追い出した。こんな淀んだ川に神様なんか住んでいる訳がない。この伝説も、子供達を森の奥に行かせない為の作り話に決まってる。

少年は水を含んだ地面に足を汚しながら川岸に着き、その丸太を拾い、背負った。そして、そばにあった川にせり出した大きな岩に

座り、一息ついた。背負っていた丸太を横に置いた。ふつと、息をつく。

近くで見ると、思ったよりも綺麗な川だった。汚れた足を見つめる。まあ、汚れた足を洗うぐらいなら……

瞬間、視界が飛んだ。

全身を冷たさが駆け抜ける。

川に落ちていた。

岩に体を滑らせたのか　川底に足が着かない！　今まで一度も“泳いだ事のなかった”少年の体は、どんどん水の中へ、引きずり込まれ　ばしゃばしゃと手で水面を叩く。助けを呼ぶ口に水が入る　むせる口に水が入る　肺に水が入る　息を吸いたくてももう吸える空気はない。目の前には、ただ濁った水だけが、死に物狂いで、両腕をかき回す、だが手応えがない。

少年は、淀んだ水の中に消えた。

## 死の流れ

暗い。暗い。冷たい、暗い。冷たい水の流れだけを感じる。

死んだ……？

死んでしまった……？

なにも見えない。完全に真っ暗、黒、闇。ただ、流れだけを感じる。

ただ、冷たい水の流れだけを。

ああ、村のみんなに、一体なんて思われるだろう……。きっと、あの川に近づいたからだ、って言われるんだろうな……。

聖なる森でも、何でもないのに。

大人達の勝手な作り話だって、みんなに教えたかっただけなのに……。

死にたくないよ……。

お父さん……。ピリカ……。

## 光る双眸

風の音。

少年はがばりと体を起こした。辺りを見回す。木、草、木、草、  
川。

今度は自分の体を凝視する。両手を開いて見つめる。そしてその手をゆつくりと、自分の首筋に当てた。

しっかりと脈を打っていた。

「……生きてる」

しばし我を忘れていた少年は、自分の体に赤いまだら模様のような光が当たっているのに気づいた。上を向くと、空を覆う木々の間から赤い空が見えた。

もう、夕方だ。

少年は村のことを思い出した。空が赤く染まる頃には村に帰り着かなければいけなかった。夜の森は獣達の時間。少年もその事は知っていた。慌てて立ち上がる。だが、ここは森のどの辺だろう……？

少年の正面の草むらが、流れる風に反して揺れた。

少年は、唸り声を聞いた。

頭に衝撃が走った。

少年は自分が倒れたのだと気づくまで一瞬、時間がかかった。地面が、木々が、真横に延びている。そして体を起こした少年の視界に、2体の獣　灰色の毛をした狼　が映った。

光る双眸が、少年を貫いていた。

木々の間からまばらに見える空は明るい。だが森の中は刻一刻と視界が悪くなっていく。

何かに襲われそうになった時は相手に背を向けてはいけない、相手から目を逸らしてはいけない。

少年は、昔父が言っていた言葉思い出した。

しかし、少年の心には少しずつ限界が近づいてきていた。

嫌な汗が、背中を、足を、頬を、つつ、と伝う。じっと立っているだけなのに、呼吸が荒くなる。今すぐにも逃げ出したくなる。しかし、それはしない。できない。目を逸らした瞬間、襲われる直感的にもそう感じる。事実、突然の出来事と恐怖心とで、その二対の瞳に目が釘付けだった。逸らしたくても逸らせない。瞳の光が輝き、ぎらつき、視界を埋め尽くす。その光の中で、狼が跳躍し、首筋に噛みつく幻覚が見える。牙が首に食い込む感触すら、感じる。少年は、無意識に一步、後ずさった。

ぴちゃっ

少年の足が水を跳ねさせ、

狼が跳ねた。

ずっと目線を動かさずにいた少年は、突如動いた狼の姿を捉える事ができない。ただ、地面を蹴る音が耳に入ってくる。声もでない。殺されかけている、と自覚するための時間も、ない。

一匹の狼が少年の首目掛け、飛んだ。

## 悪魔の化身 更新

刹那、涼しげな風が吹き抜けた。

その風が少年をかすめ、瞬く間に二匹の狼を吹き飛ばした。凄まじい勢いだった。風が、空気を切り裂く音を立てた。

いや、違う。

少年は気づいた。

“風”ではなかった。

“尾”だった。

まるで蛇のようにしなやかな尾、しかし、それはあまりにも大きな尾。少年の後ろから伸びるそれは、少年の前方に見える部分だけで、少年の背とほぼ同じ長さがあった。鱗はなくなめらかに蒼い。表面は濡れており、ぽつぽつと降る夕日を浴び、反射している。

その尾の速さのせいで、一瞬それを風だと思ってしまっていたのだ。

少年は、尾の伸びてきた方向　後ろを向き、その本体を見た。

大きすぎる蛇が、そこにいた。

体長は……数メートルはあった。これほど大きな生物を見たのは初めてだった。翡翠色の瞳は爬虫類のそれのようで、同時にどの生き物とも違うようにも見えた。

乳白色の蛇腹と蒼い身体、全身が透明な液体に覆われていて、夕日を淡く跳ね返す。

悪魔の化身だ。

少年は悟った。確証などなかったが、そう悟った。大蛇の尾に吹き飛ばされた二匹の狼は既に体を起こしていたが、襲いかかってこない。その場で唸り続けている。

大蛇は口を開けた。空気を震わせ、威嚇の音を出す。草木が振動し、震え上がる。

前方に狼、後方に蛇。少年はどうする事もできずに、大蛇の威嚇に背筋を凍らせていた。

二対の双眸のうち一対がふっ、と消えた。草を乱暴に揺らし、だんだんとその音も遠ざかり……消えた。もう一方の狼は未だに牙を剥き出して唸っているが、その目には怯えの色が浮かんでいた。狂気を宿しているようにも見えた。大蛇は狼に向かって翡翠色の目を見開いた。中の瞳はすっ、と狭まる。

圧力。

少年は全身にびりびりと圧力を感じた。直に睨みつけられた狼は、身動きすらとれず、跳ぶ事も退く事もできず、ただ絶望というものを生まれて初めて感じていた。

大蛇は口を開き、大きく長い舌を出した。その舌は普通の蛇のそれとは大きく異なっていた。

まず、圧倒的な質量感があつた。分厚い肉質を持ち、赤と紫の混ざつたような色味をしていた。舌の先端は二つに分かれていなかった。

重力のような、目に見えない力を受け、抵抗も何もできない狼を

大蛇はその舌で絡め取る。その舌の動きは、もはや独立した一つの生き物にすら見えた。唾液が妖しく光りながらねっとり糸を引く。口から見える部分だけで、少年の背丈近い長さだ。

大蛇が舌に軽く力を込めると、何かが碎ける音と共に狼の目から光が消え失せた。

大蛇の口が、更に大きく開かれる。ゆらりと舌が動き、獲物を口の中に消していく。

ゆつくりと、大蛇の喉が動いた。

少年は大蛇にじつ、と見つめられた。もの凄い圧力が襲い掛かってくる。肉体的になのか、精神的になのかは分からないが、体を動かそうと思っても動かせない。

少年は大蛇の瞳から目を逸らせない。逸らそう、という考えすら起きない。もしも逃げようとしたとしても、大蛇との距離はわずかしかない。一気に吞まれてしまうのがオチだろう。

いまや少年は“蛇に見込まれた蛙”だった。

ずるり。

と、大蛇は少年に近づいてきた。巨体とは裏腹に、滑らかな動きで身体をくねらせる。地面の草が擦れる音。

少年のすぐ側まで近寄り、大蛇は首をもたげた。視線は少年を捉え続けている。シュー、と息を漏らした。

少年は、もう逃げなかった。これは聖なる森に入った罰だ。聖域を汚した僕を罰するんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6724r/>

---

神の崇りに抱擁を

2011年3月29日16時11分発行